

# 茶道流派・遠州流の形成 — 『辛酉紀行』の役割—

藤原みずき(関西大学)

## 1. はじめに

遠州流茶道は流祖である小堀政一(1579~1647)(以下遠州と称する)は「綺麗さび」と称される美意識を真髄とする、現在まで継承される茶道流派である。遠州は現代において大名茶を確立した武家茶人として特に周知されているが、茶道だけではなく、書や和歌、作庭など様々な分野に才能を発揮した。本発表では、遠州が自らの美意識をもって、新しい時代の価値観を創造する役割を担ったことを確認する。また遠州の美意識が17世紀という新しい時代において、その新しい時代の美的価値観として醸成されてきたことを指摘する。そして遠州流茶道によって流祖遠州の著作として伝承されてきた紀行文『辛酉紀行』を取り上げ、定家様を用いて書写された『辛酉紀行』伝本に着目し、遠州流茶道における『辛酉紀行』の役割について考察する。定家様で書写された『辛酉紀行』テキストが、伝承過程において、遠州の自筆本であると認定され、遠州の美意識を伝えるテキストとして、遠州流茶道伝授の場で享受されてきた可能性を指摘する。

## 2. 遠州の評価

遠州は江戸時代前期の大名である。近江国坂田郡小堀村に小堀正次(1540~1591)の長男として生まれる。正次が豊臣秀長(1540~1591)に仕えたことから、遠州は秀長の小姓となり、その後豊臣秀吉(1537~1598)に仕えた。秀吉の死後は徳川家康(1542~1616)に仕え、関ヶ原合戦(1600年)では徳川方に参軍した。そして慶長13年(1608)には、駿河国駿府城の築城において作事奉行をつとめた功により、従五位下遠江守に叙任され、以後「遠江」つまり「遠州」と通称された。また遠州は徳川幕府において伏見奉行はじめ数多くの奉行職を勤めた。しかし元禄16年(1702)に成立した家伝・系譜諸である『藩翰譜』<sup>1</sup>は、遠州について、武士としてよりも、茶人として、また書や和歌、茶道具の鑑定に秀でた文化人として、次のように記す。

政一初め豊臣家に仕へて、其後徳川殿に召仕はれ、<sup>近江国にて</sup>元和九年、伏見奉行職に補せられ、職にある事二十余年、正保四年二月六日、六十九歳にて卒しぬ、(中略)古田織部正重能、利休上足の弟子にして、政一又古田が第一の門人なり、其道の事は云ふに及はず、手能く書き、歌よみ、眼高く、書画万の器珍、悉く其鑑定を待て、世の価を高下す、されば水より出し氷、藍より出る青色、世々の先達を超過して、上中下のもてなし譬を取るに言葉なし

遠州の書について、特に定家様の上手であったと伝えられている。定家様は藤原定家(1162~1241)を祖とする、筆圧の強弱を極端に表した線質が特徴の書流である。定家は和歌にすぐれ、それを学問化する歌学、そして日本の古典文学に精通する。定家様は定家の精神を象徴する書流として文化人に使用された。武野紹鷗(1502~1555)が定家の歌論に茶道と同一の精神を見だし、定家様で書かれた「小倉色紙」を茶席の床掛けに用いて以来、定家様は茶道においても尊重された。遠州も多くの茶

人たちと同様に定家の書を収集し、定家様に親しんでいたことが、遠州の所持した道具の記録や茶会記から確認できる。さらに遠州は定家様を学び、自ら定家様を書いた。『万宝全書』<sup>2</sup>「本朝古今名公古筆諸流 定家流」の項に遠州の名を確認できる。『校合雜記』<sup>3</sup>には、遠州の定家様は定家の自筆と間違えられるほどだったという逸話も残されており、遠州が定家様の書き手として高い評価を受けていたことが確認できる。また和歌についても後水尾天皇(1596～1680)撰と伝わる『集外三十六歌仙』<sup>4</sup>に選出されるなど、一定の評価を受けていた。さらに遠州は定家様を自らが鑑定した茶道具の箱書に用いていた。

遠州は茶道具の目利きとして高く評価されていた。多くの鑑定依頼が遠州に寄せられていたことも、現存する書状などから確認できる。例えば『桂光院宮武家来翰留』<sup>5</sup>に収められる遠州の書状の写しに、八条宮家から水指三つの鑑定を依頼されたことが記されている。また遠州は鑑定にあたり古い名物の真贋を見分けるだけでなく、無名の茶道具の中から価値のあるものを新たな名物として選定した。遠州が活躍した17世紀初頭では、秀吉が朝鮮に侵攻した壬辰・丁酉の倭乱(1592、1597年)の際に、諸大名が日本に連れ帰った陶工たちによる開窯を契機として、日本でも多くの新しい茶陶が作られ始めていた。しかし新しく日本で作られた茶陶は、日本の茶道において絶対的な価値をもっていた、朝鮮物・唐物と総称される朝鮮陶器・中国陶器に対して、日本で作られた陶器には、新しい価値を加えるために、鑑定が必要だった。こうした状況の中で、新たな茶道具の価値を創造する役割を果たしたのが遠州であったのだ。遠州は茶道具を選定するにあたって、和歌に詠まれた詞、つまり歌語を銘とする、いわゆる歌銘をつけた。そして茶道具を納める箱には、その歌銘と、歌銘の由来となった和歌を定家様で書きつけた。歌銘と和歌を定家様で書きつけることによって、日本で生産された無名の茶道具に、新たな由緒と価値が生まれたのである。日本で生産された道具が、新たな名物として認識されたわけである。遠州による茶道具の命銘は高く評価されていた。茶道具の一つである茶入が制作されるにあたって、出来上がる前から命銘の依頼があったことを記した書状も残されている<sup>6</sup>。なお遠州が選定し銘を付けた茶道具は、松平不昧(1751～1818)<sup>7</sup>によって中興名物と分類されていた。不昧は中興名物を「遠州以後の名物」と位置づけ、茶道具の選定における、遠州の鑑定眼を高く評価している。

ただし遠州がその美意識をもって選定した、日本で生産された茶道具は、千利休<sup>8</sup>(1522～1591)が見出した茶道具とは異なるものだった。例えば、利休の好んだ茶道具は色調やデザイン、その創造性を抑制したものであった。対して、遠州が好んだ茶道具は均整のとれた形と装飾性、明るい色調を特徴としていた。遠州が活躍した17世紀には、京を中心とする王朝文化の復興が確認できる。遠州好みと称される茶道具が、そういった文化的背景において評価されていったと考える。遠州の美意識が形成された背景には、遠州が活躍した17世紀の文化、いわゆる「寛永文化」があった。

### 3. 17世紀における文化と遠州

17世紀初頭、大阪夏の陣(1615)により戦乱の時代は終わった。社会は安定と平穏の時代に向かっていく中で、文化人たちはサロンを形成し、そのサロンにおいて、和歌や連歌、日本の古典文学を学ぶ学問なども流行し、公家、武家、僧侶、町衆といった身分を超えた交流が行われていった。そして

このサロンを通じた交流の中で、新しい時代の美意識が醸成され、文化人たちによって共有されたのである。そのためサロンに集う人々には、幅広い総合的な教養をもつことが求められた。王朝文化の復興も、その一つである。京を中心とした禁裏・公家の華やかな文芸活動や、定家様と称する書風が流行した。遠州も定家様の上手であったことで知られている。寛永文化に呼応して、遠州は和歌や定家様を学び、さらには王朝文化の美意識も自らの美的価値としたのだった。

熊倉功夫氏は、寛永文化における美意識の特徴を「きれい」という言葉で表現して、次のように説明している。

「きれい」という美には、優美で調和の取れた王朝的な美が含まれる。さらに和漢の古典的教養が求められ、また華やかな装飾性が含まれていて、その装飾性はモダンさで明解さをともなっている。この「きれい」という感覚は、表現の違いや流派、身分の違いを超えて寛永文化に属するさまざまな作品に共通するところがある。<sup>9</sup>

遠州の美意識が「綺麗さび」と称されるのは、寛永文化の美意識が反映された結果だろう。寛永文化の代表として遠州が存在した。遠州の茶道は「綺麗さび」という美的価値に結実し、茶道流派・遠州流茶道は「綺麗さび」を真髄として展開していったと考える。

#### 4. 定家様で書写された遠州の著作『辛酉紀行』

遠州流茶道が継承される過程において、定家様が流祖遠州の美意識につながるものとして重要視されていた。遠州の子息や弟子は、遠州に倣い、定家様を用いた。遠州流茶道13代家元・小堀宗実氏は遠州流茶道における定家様について、次のように述べている。

遠州流だけが同じ、先祖からのずっと同じ字を連綿と継承して行くと、ある意味では、茶道のお点前、そういったものと同じような意味合い、同じような重要さとして、和歌と文字がある、というふうに言われておりました。<sup>10</sup>

定家様は遠州流宗家において、遠州流代々の家元が継承すべき書風であり、遠州流茶道の継承において、流祖遠州につながる書風と意識されていた。『辛酉紀行』は遠州が定家様で書写したと伝えられる遠州自身の著作である。元和七年（1621）に江戸を出発して京に帰着するまでを書き綴った紀行文である。『群書解題』には「洒落けの多い流暢な文章で、狂歌調の勝つた和歌がところどころよみこんであつて、近世風の特徴が見える。文章でも和歌でも掛詞の技巧にとくに興味をよせている」<sup>11</sup>とある。また『古今和歌集』等に入集する和歌を引用し、『伊勢物語』をはじめとする王朝文学を踏まえた記述が確認できることから、遠州の教養を伝える作品であると周知されている。井上宗雄氏は「ペダンティックともみられるが、この紀行文の基調が、まさしく古典・古歌を背負った雅文体であることを示している。」<sup>12</sup>と指摘する。

『辛酉紀行』には管見に及んだ限り、31本のテキストが現存している。そのうち定家様で書写されたテキストが8本あり、うち6本が遠州自筆本と認定されている。遠州流茶道において、定家様で書写された遠州の著作を、流祖自筆であると認定することによって、茶道流儀を継承したことが指摘できよう。

## 5. まとめ

遠州<sup>えんしゅう</sup>は新しい時代の美的価値観を創造する役割をも担っていた。遠州<sup>えんしゅう</sup>の美意識が同時代の人たちに評価されたのは、戦乱の時代が終わり、徳川幕府が新しい時代を創生する 17 世紀の息吹と、そこに生まれた文化があった。遠州<sup>えんしゅう</sup>は和歌や定家様<sup>ていかよう</sup>といった、当時の文化人たちの教養を身に着けていた。茶道流派・遠州流<sup>えんしゅうりゅう</sup>茶道の形成には、17 世紀の文化人たちの美的価値が投影されていたのである。それゆえに、定家様<sup>ていかよう</sup>で書写された『辛酉紀行<sup>しんゆうきこう</sup>』テキストは、遠州流<sup>えんしゅうりゅう</sup>茶道において、遠州<sup>えんしゅう</sup>の自筆と認定されていたと考える。

---

<sup>1</sup> 大槻如電校『校刻 藩翰譜』巻三、吉川弘文館、1956

<sup>2</sup> 元禄 7 年（1694）初版。美術、茶道具の百科全書。

<sup>3</sup> 酒田市立光丘文庫蔵『校合雑記』、新日本古典籍総合データベース画像データ  
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100202829/viewer>

<sup>4</sup> 「集外三十六歌仙」（『続々群書類従第十四』、国書完成会、1907）

<sup>5</sup> 宮内庁書陵部蔵『桂光院宮武家来翰留』、新日本古典籍総合データベース画像データ  
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100250512/viewer/73>

<sup>6</sup> 高橋義雄編『大正名器鑑 第五篇下』、大正名器鑑編纂所、1923

<sup>7</sup> 江戸時代後期の大名。出雲国松江藩 10 代藩主。江戸後期を代表する茶人であり、不昧流の流祖。

<sup>8</sup> 安土桃山時代の茶人。わび茶の大成者として知られ、日本を代表する茶人である。千家流茶道の流祖

<sup>9</sup> 熊倉功夫「近世の茶の湯」（『日本茶の湯全史・第二巻 近世』、思文閣出版、2014）

<sup>10</sup> 小堀宗実「小堀遠州と定家様の書」（『定家のもたらしたもの』、翰林書房、2018）

<sup>11</sup> 「遠江守政一紀行」（『群書類解題 十一』、続群書類従完成会、1960）

<sup>12</sup> 井上宗雄「小堀遠州の文学」（『淡交 三二』、淡交社、1978）

## 参考文献

森蘊『小堀遠州』、創元社、1974

熊倉功夫『熊倉功夫著作集 第 5 巻 寛永文化の研究』思文閣出版、2017